

クローズアップ

CLOSE UP 診療科

腫瘍内科

薬物療法を中心に

ひとりひとりに

合わせた治療を

腫瘍内科 部長 いし べろ しん ご 石黒 慎吾

近年の目覚ましい進化を遂げるがん治療薬を駆使し、治療を行う腫瘍内科の取り組みについてご紹介します。

あらゆる固形がん※に対応できる 診療科を目指して

腫瘍内科では原発不明がん、希少がんを含め幅広く固形がんの診療を行っています。主に薬物療法（抗がん剤治療）を中心に、各専門診療科の協力を得て、手術や放射線治療などを適切な時期に組み合わせて最適な治療を提供しています。

「原発不明がん」とは腫瘍の一部を採取して病理学的に悪性腫瘍と診断されているが、いくら検査しても最初に「がん」ができた場所（原発巣）がわからない「がん」のことです。例えば、女性でわきの下（腋窩）に腫瘍が出来て大きくなり続けるので、この腫瘍の一部を採取し調べたら癌と診断された場合には、腋窩に転移することの多い乳癌を疑います。しかし精密検査をしても乳房に癌を認めないときに原発不明がん（乳癌推定）と診断し、乳癌に準じて治療を行います。肺癌が推定されれば肺癌、胃癌が推定されれば胃癌の治療を行うわけですから腫瘍内科の医師はほとんどすべての臓器のがん治療に精通している必要があります。

希少がんとは、人口10万人当たり6人未満の珍しいがんのことです。胃癌や大腸癌、肺癌、乳癌といった症例数が多い癌は臨床試験により科学的に有効と判断された標準治療が確立していますが、希少がんは症例数が少ないので大規模な臨床試験は行えず有効な標準治療がないことが多いため、少数の治療報告例などを参考にして最善、最適な治療を検討して行っています。軟部肉腫や粘膜型悪性黒色腫も数多く治療を行っています。

※固形がん：白血病などの血液がん以外の、臓器や組織などから発生するがんの総称



外来化学療法センター

がんの特徴を調べて ひとりひとりに適した治療法を探す

がん遺伝子パネル検査が2019年6月から保険診療となりました。この検査はがん細胞の遺伝子レベルまで解析し、がんが増殖する原因となっている遺伝子変異が見つかり、その遺伝子変異のあるがんを対象として、現在開発中の抗がん剤治療などをご紹介するために行います。標準治療がある固形がんでは治療実施後、次の治療が最後の治療になりそうという少し前に、また標準治療が初めからない希少がんでは治療開始前にこの検査が行えます。

患者さんそれぞれに有効な薬剤を 効率的に選択できる「がんゲノム医療」 への期待

これまでは原発巣がどこなのかで決定したがんの病名に対して抗がん剤を選択して治療してきましたが、がん細胞にどんな遺伝子変化があるかを調べて、その変化に応じた治療薬を選ぶ「がんゲノム医療」が始まっています。腫瘍内科はひとりでも多くのがん治療中の方に、がん遺伝子パネル検査が行われ、適切な治療が選択できるように周辺の医療機関と連携して検査の依頼を受けています。なにかご不明な点がありましたら気軽にご相談ください。